

財団法人大阪都市協会発行「大阪人」(2006年10月号)より

■片岡良子 「天文研究の始まりは電気科学館「星の学校」から」(2006)



天文研究の始まりは
電気科学館「星の学校」から

片岡良子さん

近江晴子 監修 前川健子 構成

昭和十二年(一九三七年)三月、大阪に新名所がひとつ加わった。四つ橋の大阪市立電気科学館にできた日本初のプラネタリウムである。このプラネタリウムが片岡良子さんを星の世界に誘った。小惑星10301にKATOKAの名前が付けられたのは平成十三年(二〇〇二)のこと。電気科学館から始まった十歳の少女の夢が、六十余年後のいま夜空に輝いている。

星の好きな変わった女の子

「星でも星が見える珍しいところ」が四つ橋にできたらしいから、いへん見に行か。昭和十二年三月、片岡旧姓亀井良子さんはお父さんに連れられてプラネタリウムなるものを初めて体験した。

家はガララと吉祥の地、天満川沿いの河原町にあり、父は「星の科学館」に「四つ橋の科学館」というのができたから見といた。父の代になつてオララ食器の商売を始めた。それで瀬戸物町にも近い橋本に店を構えた。家は東区小橋西之町にありました。赤十字病院の少し北の方

です。私はランパス幼稚園、大阪市立清瀬小学校に通いました。

味原小学校の校区で、たんですけど、清水谷高等女子学校に行く生徒の多い清瀬に越境入学したんです。私の学年は二十四、五人も清水谷に進学したんです。

小学校の四年生も終わる昭和十二年の三月、電気科学館に日本初のプラネタリウムができて、父が「四つ橋の科学館に」というのができたから見といた。父の代になつてオララ食器の商売のころにあつて四つ橋にも近いんで、私と年子の弟を連れて行つてくれたんで、オララ「ん、一週間も経てない時やと思ひます。プラネタリウムのある建物は、

正式には天象館と言いました。中に入りました。昼間に入つたはずなのに夕方の大阪映し出されるんですね。なまも春日出の発電所と八木煙突が印象的でした。初めて聞く星座の名前やら、星座神話に興味をわいて、その後も父にねだつて月に一回は真夜の夜空を見に連れてってもらいました。

昭和十八年(一九四三年)二月に礼島の普賢寺食があたりです。清かな谷高女にはつらやい望遠鏡のいいんですけど、それを借りて部分日食だけでも見せてもらいたいと思つて、朝早くに行かんで、そうしましたら物理の助手してはつた先輩の佐竹サクスさんが、「アタ星、好き、好き、ちたら

勉強できるところあるよ」と言うてくれはつたんです。それが電気科学館の「星の学校」でした。

土曜講座という大人向けの講座に通つておられた佐竹さんらも少し易し星の講座を聞いてほしいと申し入れて開講されたのが星の学校です。京都大学教授で花田天文台長、電気科学館のプラネタリウムについて「お力された山本

一清先生の天体と宇宙の本をテキストに、技師の佐伯先生ほか三人の先生が、第一、第三日曜の朝十一時から義をしてくださつたんです。五十人くらいのおむらもが通つてました。後に天文学者になられた中井善寛さんなんか小学生です

昭和十二年、大阪市立電気科学館が開設して以来、星のとりこになった良子さんは大正十年(一九二二)生まれで、良子さんの星の研鑽活動にも、お力された、現存は、未開刊にも、熱心な指導をされて、お二人の業績を、書籍として出版された。

の、に、女学生の私よりずっと物知りなんです。そんな方たちと、年齢に関係なく勉強するのも楽しいです。天象館の屋上のドームの外側は地球儀になつてまして、小さなタイルで北半球が描かれています。そこに自由に登つていいんです。男の子は自由に駆け登つては遊んでました。私は日本との



上●片岡さんが通ったランパス女学院は現在の昭和大学の前身で上本町6丁目にあった。写真の建物にはウィリスの建設と言われている。
右●八坂の国政学校で訓練として勤務。左が片岡さん。
下●電気科学館に毎日通っていた、清水谷高等女学校時代の片岡さん。



ぐらしがたがれませんが、男子たちが話す頂上の様子を聞いて、驚かして楽しんでました。開講になり、四つ橋学校とは毎週だりしてました。夜に希望者だけ集めて屋上で天体観測する。観望会、花山天文台や、草津駅から六ヶ子歩いかなかん山田上村の山本天文台での特別講義もしてくれはたんです。女の子は、先着の佐竹さん、大西さん、私の三人だけでした。当時は星に興味を持つ女の子なんて、変わった子やと思われてましたね(笑)。

心斎橋で望遠鏡を手に入れて
一星の学校が始まったのは昭和十六年(一九四二)の年末に近しいころだった。日本が米英蘭に宣戦を布告し、ハワイ真珠湾を攻撃したのが十二月八日、皮肉にも敵艦ははつり形になって見えなくなった。始まったのである。良字さんはますます星の世界に興味をひかれ、毎日電報科学館に通った。

いつのころからか、日曜日だけでは物足らんようになり、毎日放課後、学校から直接行って、圖書

を読んだり、技師の先生方と話したりするようになり、先生方は私を子もやと思われ、教科書には載っていない天文の新しい情報も教えてくださるんです。それを楽しんで歩いて、学校の勉強どころやないようになり、あなたです(笑)。学校からは市電乗り換えなしで行けず、家からは海町まで行かず、夏休みも学校の行事として、諏訪森で海水浴があるので、それ、その桶りも濡れた水着のまま行きました(笑)。高学年に

になると、海にフランスを張って見張り番の役をするんです。昔が泳ぎ終わった後に泳がせてもらえんぞ、音楽の水井澤先生に「足で目を揉ごらん」と言われて、やってみると毎日目が十個くらい探れるんです。それ持て科学館に行くと「草しきこに四つ橋を四つ橋り」という小西米山の句は、当時から大好きでした。父を降ろして、まず西へ吉野屋扉屋橋をへ、そして、野橋を西へ渡って科学館に入ることにしたんですが、いつも釣を口ずさんで渡っていました。川では船頭さんが舟を滑り、四つ橋で川の流れは、電氣科学館の思い出に、しかも目に焼き付いています。入場料払わんと毎日入らして、プラネタリウムの解説の内容を全部覚えるし、先生風邪引いたら代わってあげる、というくらい三人の先生の特別も、一あそこの言ひ方下手や、言った方がよいよと、生真気なことも言ふよと、そのうち「機械を触らせただけよ、と言ったことあるよ」と、山本、清先生にも可愛がっていた。家で、アタはこういことこに

興味を持ったんやから、生練けて行きまくった。天象館のクインとも言うてもいい(笑)。
昭和十八年(一九四三)の春を、求て見たら、小丸山、ちうと南の方のカタラ屋さんに望遠鏡が置いてあるのを見つけたんです。観中ですが、そのころ望遠鏡なんかあまりなかった。見た八十円で書いてあるんです。家に飛んで帰って父に望遠鏡、売って、八十四で書いてあったと興味が言いました。

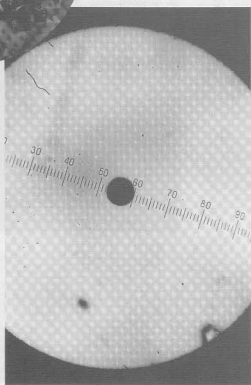
月給が四十円ぐらいの時ですから、高橋でよ、ところが父は「なかなたら、かんからず、買いに、これ、いいました。それで初めて自分の望遠鏡をお目玉に見ました。自分でプリントを合わせ、カメラがはきり見えた時には感激しましたね、灯火管制でまた、な、おさら、星がよく見えました。戦争のさか、望遠鏡を売って、というところが、私にとっては幸運でした。ウチの父は愛おむたんで、私とのスキ、や林間合宿なんかは行かしてくれへんので、そのや、夜、星を見て、人で行くのは何も言わへん、今かと思はへんが、良理解者でした。



上●結婚前に結婚、新婚時代、夫の業績さんとの数少ない記念写真。右●顕微鏡で見た、約8ミクロンの流星塵。



宝塚山本の杜宅付近。電気科学館での勉強を再開したころ。



トル姿でした。披露宴もするところないですし、父の実家がある岐阜の従兄弟たちがお野菜なんかを持って来てくれて、それを料理して食べたようなことです。

しなさい」と、火星が動いていく経路を星図のみに書いたりすることやら教してもらいました。ほんとは女学校出から、女専へ行く、京大の宇宙物理学科に行きたかたです。けど、戦争がひどくなると、親が兄弟もよけいいるんやし、女は女学校で十分と云い

ましたんで、結局女専には行けなかったんです。ただ、微用に行かされるのが心配やからというので、清水谷の中で置いた臨時教員養成所に入り、五年生の三学期はそこに行く教員免許を取りました。科学館も男の方が次々と招集されて、プラネタリウムを動かす

技師がいけないので、私に動かしてくれな、かという話もありました。そうなれば初の女性のプラネタリウム技師になれたんですけど、国民学校に就職が決まってるんでお断りしました。卒業して、八尾の志紀にあった国民学校の正副教員であるんですけど、四等星くらい大きい大きさも色も決めて

古びた鏡つて、父と母でプラネタリウムを作りました。八尾ですからプラネタリウムなんて子どもすらも見たことないでしょ。喜んでくれました。またごね。主人は昭和二十年（一九四五年）の三月に結婚しました。三十三日の大や変ですべて焼けて役取りましたごね。主人は、家近所のおばさんに三九度の金をもらって、私はもんで、主人はゲー

子育てしながら流星塵観測 結婚後も、片岡さんの研究は続いた。戦後も電気科学館に通い、女性ばかりで流星塵の研究を始めた。庭にフレバワートのガラスを出し、採取した際に、当時、世界の天文学者が注目する流星塵を確認し、話題になったこともあった。望入り道具に、心斎橋で買った望遠鏡を持ってきたら、主人はびっくりしていました。戦後も、再開された四つ橋の科学館に通いました。主人の勤め先の住友金属が煉用で建てた社宅が、宝塚の山本にあつて、そこへ引っ越しました。子どももできましたが、主人の両親がみてくれたり、社宅には子どもがたくらんでいたりで、わりに安心して科学館にも行けました。昭和二十五年（一九五〇）に米国のハイダ天文台のホーヤブル氏が、初めて流星塵の写真観測に成功して、世界の天文学者をおこにに興味を持っていただくのを聞き、女性ばかりで流星塵の研究を始めました。フレバワートのガラスにマゼリンを塗って外に出しておいたら、流星塵が落ちてくるのを受けられるんです。成分は鉄分とかシリコンで、黒く光ります。三日間くらい出し続けますと、たった一枚だけで多い



時なら二〇
ミクソンの二個くらい、小さいのは
もつたくらう採取できます。これ
なら夜起きなくていいし、週二回
くらいガラスを取り替えて、観測
日誌に天候や風速などその日の気

流星塵の研究が「星を見
つめる主婦」と題して、新聞
に大きく取り上げられた
(昭和30年6月24日読売
新聞夕刊)

特集
東京発の小さな旅
作家5人の競作紀行文
恩田陸 日光 堀江敏幸 多摩路線バスの旅
関川夏央 関東金野一周電車の旅 中上紀 大島
島尾伸三・潮田登久子 福島県相馬
対談 紀行文の各手が選ぶ旅を読む 100冊 池内紀×嵐山光三郎
作家の旅の七道具
角田光代 安野光雅 ホンマカシ 春風亭昇太 鹿島 藤原哲雄 大田暹晴子

築70年、初公開された
「日本民藝館」
創設者 **柳宗悦**を訪ねて 柏木博
小特集〇没後50年
映画監督 **溝口健二の世界**
イタコヒ〇新藤兼人 香川京子 成澤昌茂
東京下町の人間と情緒の世界 川本三郎

10月号 9月2日発売
■定価900円(税込)
東京人 TOKYO
都市出版
〒102-0071 東京都千代田区富士1-5-8 大新築ビル3F
TEL.03-3237-1705 FAX.03-3237-7347

象を記録するだけ
で、主婦もやりやす
かったんです。
流星塵は流星が大
気圏に入って燃えた、
その燃え残り、世界中で
採取できるんです。いつ
か、にやてた人のお友
達が西島英三郎さんと、
南の水の中から流星塵
を採取して、持ち帰って
もらって、持っていました。
私が流星塵のロマンアで、
それも関西では女性ばかり
でしたので、新聞に取り上げ
られたこともありました。

**女性天文家のために
ペガ賞を創設**
平成十三年、片岡さんの長きに
わたるマチア天文家としての
功績が認められ、平成元年(二九
八九)に発見されていた小惑星に
KATOKAの名前がつけられた。
四つ橋のプラネタリウムに通い始
めて六十余年が経過していた。

二一カレドニアにハリー・シュワ
ズに見に行ったり、アメリカのアリゾナや
パロマ天文台にも行きました。国内
は、あちこの天文台長とも顔見知
りなので、流星なんかを見に行く
旅行にもよく行きました。東亜
天文学会に私が所属して五十周年
の時、何かお役に立つことないか
しらと尋ねまして、天文に貢献の
あった女性を顕彰するペガ賞という
名称の賞を作ることになりました。
学会の理事も長くいましたし、流星
塵の比較研究の草分けだったこと
とか、そんなマチア天文家として
しての功績に対して、19等級くらい
の小惑星に「KATOKA」という
名前を付けることを推薦してくれ
はって、それが国際天文学連合
(IAU)に認められたんです。
小惑星は小さい天体で、火星と
木星の間をたぐり回っています。
いま二万個くらい発見されています。
「KATOKA」は、あまりの直径八
キロくらいのお岩石で、おもしろい
小惑星です。小惑星の研究者も
かほつき星を探しておられる方が
持っておられるような天望遠鏡
でないとも見られないんです。でも
広い宇宙に小さいながら、わが名
のついた星が運行していることを思う
と感無量です。男の世界は何億光年
の世界、地球にいる私は、なんと小
さいことか、と思います。な、つづは
私が電気科学館のある大阪で生
まれて、心算で望遠鏡を買って
もったことから始まりました。